

## 令和6年度 関西医療大学・関西医療大学大学院 入学式式辞

只今、入学宣誓をされた学部生並びに大学院生の皆様、また、保護者の皆様、本日のご入学誠におめでとう御座います。

冬が過ぎ、長かったコロナ禍を乗り越えて、新たな自由な春を迎えています。今、学園は新緑につつまれ、新たな息吹が満ち、遅かった桜も一気に開花してまいりました。

本学の所在地である「熊取町」の“くまとり”は、一説には歌舞伎役者の目のまわりの隈取（くまどり）に由来すると言われ、町全体が紀泉山脈の山々と深い緑の丘陵に取り囲まれた環境にあることを暗示しています。それが、陸の王者であり神聖な動物である「熊」を意味する字に変わったと言われています。この人口約4万人の熊取町には、本学に加えて京都大学複合原子力科学研究所、大阪体育大学及び大阪観光大学と4つの大学があります。これら大学の学生数は約5,000人であり、熊取町人口の1割近くの若者が行き来する町と言えます。この4大学は、地域連携という意味でも、それぞれの特色を生かしながら地域の発展に貢献しており、熊取町は近隣にはない一つの学園都市となっています。

一方、海に面しては、関西国際空港があり、海外へも門戸を広げています。また、背後の紀泉山脈を越えると紀ノ川があり、世界遺産の高野山と熊野の山々が連なっています。学部生の皆さんも、これまでのコロナ禍における高校生活の気分を一新し、また、大学院生の方々も、この田園の豊かな緑の中で心身を癒し、勉学に、研究に集中して頂けたらと思っています。

さて、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックの影響は、世界全体、日本の私たちの大学も含めて、さらには家庭や個人生活レベルまで例外なく及び、人々の「絆」を切り崩しました。本学でも、孤立する不安感から学生相談室の利用やカウンセリングを必要とする学生が増えました。対面授業もなく、学園生活も楽しめず、学友との「絆」を築けず、深刻な打撃となりました。「三密」を避けるためとは言え、医療大学としても、病院実習の中止などを含め多くの面で厳しい制限がありました。その中で、大学教育システムは、急速にICT化し、「遠隔授業」へと移行しました。有用ではあるものの「対面授業」が行えず、人と人の直接的な「絆」が絶たれ、学生さんや教職員一同にとっても心身ともに大きな負担となりました。また、このコロナ禍では、高齢者は施設へ隔離され、病状が悪化しても家族との面会もできない状況が続いていました。若い世代と高齢世代が隔絶され、生活の上でも、知識や技術の伝達、伝承の上でも大きな障壁となりました。本学でも、地域の人々との交流が絶たれ、公開講座の中止や診療所での診療にも深刻な打撃を受けました。

しかし、これから私たちは、ポストコロナ時代へ向けて、新たな教育への取り組みをしなければいけません。本学の淵源は、東洋医学の鍼灸学にあります。平成15年4月に関西鍼灸大学（鍼灸学部）として四年制大学となって以来、開学二十周年を経て、今や、大学としては2学部6学科となりました。一方、大学院は、本年度から保健医療学研究科の修士課程

に加えて博士後期課程が開設され、高度な研究活動の拠点として学内外の皆さんが集う環境が整備されました。その結果、学生総数約 1,400 人を擁する総合的医療大学へと発展しています。

さて、大学における学びとは何か。大学教育も、これまでの教授を中心として一方的に教員が「教育(Instruction)」するシステムから、学生の皆さん自らが能動的に「学修(Learning)」する方向へとパラダイムシフトしてきました。そして、入学後は、高校時代とは異なる勉強スタイルも身につけなければなりません。これからの本学におけるガイダンスや導入教育の中で、その点をよく理解して頂きたいと思います。

「論語」の最初の言葉には、「子曰く、学びて時に之を習ふ、亦説(よろこ)ばしからずや。朋あり、遠方より来たる。また、楽しからずや。」と、共に学び合うことの喜びが謳われています。自学自習するとともに、新たに遠方より加わった仲間と共に学び合う、喜びを語られています。そして、「いつ、どこで、誰と学んだか」、大学生活の中で、何を学び、どこで、どのような人とネットワークを築いたか、それは皆さんの生涯に亘って重要で大きな資産となります。

少し話題を変えますが、近代医学における偉大な医学者・教育者であったウィリアム・オスラーは、1896 年、「南部の熱病の研究」と題した講演の中で、次のように述べています。

「人間には三つの大敵しかない。熱と飢饉と戦争である。この中で最大かつ最悪の敵は、熱である。」

ここで言われる「熱」とは熱病、すなわち、今回の新型コロナウイルス感染症のような疾病を指します。事実、人類の歴史そのものが、感染症との闘いの連続でした。そして、飢饉や戦争を含めて、感染症が地球上からは消えることはありませんでした。更に、これに加えて地震や風水害も、過去から現在まで人類の歴史の中で絶える事なく続いていることは、皆さんもご存じの通りです。

そもそも「人間は生きものであり、自然の中にある」ことを忘れがちです。しかも、自然は人間が制御できるものではなく、もっと大きなものです。私たちは自然の中で生きている事さえも忘れがちで、自然と真摯に向き合わずにきました。80 億にも達した人口が消費する膨大なエネルギーにより、地球環境は大きく変化し、その逆襲を受けているといえます。これを「人新世」と呼んでいます。

このような現状の中、今や専門知識だけでなく、人文・社会・自然科学を広く横断的に活用できる「総合知」が必要となっています。更に、その「総合知」を育むためのデザイン思考・アート思考も重要視されてきました。

本学は、「社会に役立つ道に生きぬく奉仕の精神」を建学の精神としています。すなわち、医療社会の中で、科学的・伝統的知識を兼ね備えた「総合知」を持ち、心身両面にわたる癒

しの医療技術を獲得すること、すなわち、「ヘルスアート」を身に付けて、人々の健康に奉仕し、社会に貢献できることを本学の目標としています。

ところでもう一つ、「生きぬく」とはどういう意味でしょうか。

従来の教育では、積極的に前向きに物事ができる能力、すなわち、ポジティブ・ケイパビリティ (positive capability) のみが重視されてきました。しかし、最近、これに対して、ネガティブ・ケイパビリティ (negative capability) という言葉がよく使われるようになってきました。この言葉は、イギリスの詩人キーツの手紙の中の言葉に由来します。今回のコロナ禍のような、どうしようもない解決困難な状況に、答えを焦らず、粘り強く耐えぬいて「生きぬく」ことを意味します。本学の建学の精神における「生きぬく」という言葉も、キーツの「ネガティブ・ケイパビリティ」と相通じるものです。

また一方、医療の中の生命倫理においては、インフォームド・コンセントと言われ、患者さんやクライアントの立場に立って、粘り強く丁寧に説明し、理解を得た上で医療行為に当たる姿勢が必須とされます。そのためには、もう一つ広い意味で、しっかりとしたぶれない「人生における羅針盤」を大学生活の中で身につける必要があります。

前述したオスラー氏は、また次のようにも忠告しています。

「患者を診ずに本だけで勉強するのは、まったく航海に出ないに等しい。半面、本を読まずに疾病の現象を学ぶのは、海図を持たずに航海をするに等しい。」

皆さんには、これからの本学における勉学や研究において、今後の荒海を航海するため、しっかりとした海図と羅針盤を身につけて欲しいと思います。そのため、教職員一同は、一致協力して皆さんを支援致します。

最後にもう一度、学部生、大学院生の皆様、この度のご入学、誠におめでとうございます！  
共に頑張りましょう！

令和6年4月4日

関西医療大学 学長 吉田宗平